

狸 15 塔婆に生首 = = = 猪・鹿・狸より

狸の出たという場所が、申し合わせたように、村端れや境で、塞の神〔道祖神〕や道陸神〔六地藏〕を祀った跡であるのも少し気になりだした。この話もそうした場所でのことである。

長篠の医王寺の近くにあるノッコシ〔乗越〕の山は、以前から古狸が棲むと言い伝えた処だった。水上の部落と、長篠の本郷とを境した、ちょっとした窪合の峠で、道が三つ辻になっていた。暮方そこを通ると、道に何やら汚い袋のようなものが落ちているが、うっかり拾ってはならぬ、狸のきんたまで、化かされるなどと聞かされたものである。道を挟んで古木が茂っていて、辻には石地藏が立っていた。



ノッコシ

近所の若い衆がここの山続きで狸の穴を見つけ、遊び日に掘っていると、そこへ医王寺の和尚がやって来て、皆の衆ご苦労と言うて去った。それが実は穴の主の狸が化けたので、いつか抜け穴から遁げ出して、若い衆をからかったのだと言うた。あるいはまたそのおり好い天気だったが、急に雨が降って来て、皆が濡れしょぼれて掘っているところへ、和尚が傘を差して来て笑ったげな、村の某もその一人だったげななどと、まことしやかに聞かされたものである。



自分には祖父に当たる人のことだった。ある時長篠の本郷から日を暮らして、ここへ差しかかると、どう道を間違えたのか、医王寺の方向へ降りるのを、どんどん脇へ外れて行って、気が付いた時は、山続きの村の卵塔場へはいつていた。前に新仏の墓があって、白張りの提灯と新しい塔婆が立っている。見るとその塔婆の先端に、男の生首が突き通してあって、目を開いたと思うと、くすりと笑ったそうである。祖父は平素から剛胆な人だったので、それを見ると、すぐに狸の悪戯と気がついた。何だ手前の相手などしてられるかと言い置いて、そのまま後も見ずにどんどん卵塔場を出てきたそうである。それから家に帰り着くまで、もう何事もなかったと言う。この話は祖父が若い頃幾度も物語ったそうであるが、自分は祖父の妹に当たる人から聴いた話だった。

ノッコシの峠近くの家では、夕方狸に化かされて、何処からともなく、負んでくれ負んでくれと呼ぶ声がするとも言うた。内金の某の男は、ある晩医王寺の方へ向けて峠を越して来ると、突然闇の中から負んでくれという声がして、

何やら背中へ負ぶさりかかったものがあった。男は怖ろしさに夢中で、そのまま駆け出したが、医王寺の明かりが見える処までくると、ふっと背中が軽くなったように思ったと言う。内金の村の左官の某の話であった。

ここの狸は、もうとくに狩人が撃ち殺してしまっていて、その後出るのは、山続きの吉村から通って来るのだとも言うた。そうかと思うと、いやまだいる、現に誰それが化かされたなどと言う。そうかそれじゃ撃たれた奴は別の狸かなどと、話がまた新しくなって来た。すっかり噂が根を断ってしまうのは、容易ではないのである。

長篠の本郷と内金との境にある、施所橋の上へは、晩方狸が化けて出るともっばら噂した。雨の降る晩、傘を差して先へ立って行く男が、ふいと後を振り返った顔を見たら、三つ目の大入道だったとか、またある男が夜更けて通りかかると、橋の欄干に寄りかかっていた男がそのまま下へ飛び降りて行ったとも言うた。しかもこの橋などは、橋の袂にまで人家があって、狸の出る噂の場所はほんの五間か七間の処だった。狸の出るにはかならずしも人家を離れた場所という必要もなかったらしい。

